

最近の協同組合文獻について

岡 本 理 一

終戦後、謂はゆる「經濟の民主化」が時代の要請として、あらゆる方面へ浸透するに従い、今まで戰時的統制のゆゑに全く鳴りをしずめてゐた「協同組合」運動が再び活潑になつてきた。もとより今日、經濟に對する統制は依然繼續せられ、中にはその強化をみたものすらあるため、たとえ生産、配給及び消費の各面に協同組合が設けられるとも、その本來的な活動にはなお幾多の制約があるように思はれる。しかしその方向が漸次、協同組合化の方を目指してゐることには何人も異存がないであろう。すでに戰時立法たりし「商工組合法」は廢止されて「商工協同組合法」の實施をみ、また戰時中の所産たる「農業會」も「農業協同組合」に改組すべく、目下その法的措置が講ぜられてゐる。更に「消費組合」についても、從來は産業組合法による購買組合か或は無認可組合として設立するほか途のなかつたものが、今や新たに「生活協同組合法」のごときを制定してその法的根據を與えんとする機運にある。かくて「經濟の民主化」は單なる論議の時期でなく、着々具體化されてゐる例證がこゝにみられ、しかも民主化完成のためには、この運動は決して一時的現象でなく今後も長くつづくものと思はれる。然らばこれに關連する最近の我が文獻は如何と云うに、それは時勢を反映して甚だ少く、いま筆者が終戦後に入手したものをあげると左の通りである。

一 國弘員人教授著「協同組合」(B6版一四三頁、昭和二十二年六月、東京、政治教育協會發行、定價二拾八圓)

國弘教授がこれまで協同組合研究に多くの業績をつまれたことは周知の通りである。嘗て「組合經濟の研究」(昭和十五年六月)を以て新分野を開かれたが、本書はこの舊著の「生硬」と思はれるところなどを改め協同組合の總論的解説を試みられたもので、内容は協同組合の意義、形態、發展過程、附録(文獻)となつてゐる。序文で特に協同組合の意義につき時代を超えた統一的説明を與えたように述べられてゐるが、これ

には尙、批判の餘地があるように思はれる。頁數の制限があつた爲か、各節の論述が時々簡潔になりすぎ、その豊富な研鑽の程が全部うかゞえないのは甚だ惜しい。協同組合論のテキストに好適のものであろう。

尙、同教授が商工協同組合中央會（東京）の雜誌「中小企業」（第一卷第一・二・三・四號—自昭和二十一年六月至同年十一月）に執筆された論文「アメリカの商工組合」は、時節柄同國の協同組合運動を知るため甚だ貴重な文献である。

二 奥谷松治氏著「日本協同組合史」（B 6 版 三九三頁、昭和二十二年六月、東京、農業協同組合研究會發行、定價八拾圓）

奥谷氏は我が國における消費組合運動の實際家として、また研究者として夙に令名ある先覺者である。嘗ての名著「日本消費組合史」（昭和十年八月）は、我が消費組合運動の發展過程を知り將來の動向を窺う上に有益な文献とせられる。本書も嘗ての同名の著書（昭和十三年）を基礎にして多くの訂正と増補を加えられたものであるが、その分量は約二倍になつてゐるから實質は新刊と言ひ得る。内容は前編「農村の協同組合」において産業組合、農業會、農家小組合、農事實行組

合の發達を述べ、後編「都市の協同組合」において消費組合、市街地信用組合の發達が説かれてゐる。かく組合別に論述されてゐるのは、氏が前記國弘教授と異り各種協同組合の間には一貫せる共通性なきゆゑを以て、抽象化された協同組合一般を問題とするは意義乏しいと見られたからである。唯一つ本書に對する希望を申せば、書名に鑑み今後の増補において、中小商工業の協同組合として「市街地信用組合」を述べるに止まらず、更に工業組合や商業組合にも關説して貰いたいことである。尙、本書は農業協同組合叢書（全十八卷）中の一巻であるが、この叢書には近藤康男博士の「農業協同組合原論」（未刊）をはじめ農業協同組合に關する諸問題を取扱つたものが含まれ、最近第二回として新井義雄氏著「農民組織と農業協同組合」が刊行されたことを附記しておく。

三 東畑精一博士著「協同組合と農業問題」（B 6 版 四四二頁、昭和二十二年七月、改訂版、東京、改造社發行、定價百拾圓）

東畑博士が我が國に於ける農業經濟問題の權威であることは今更多言を要しない。本書は嘗ての那須皓博士との共著たりし同名の書（改造社經濟學全集第十七卷

昭和七年一月)より那須博士の執筆にかゝる分を削除し他の部分をそのまゝにして(内容―序論、協同組合の本質、組織、機能、協同組合と農業)これに嘗て東京商科大學一橋新聞部編「商學研究の栞」(昭和十七年八月)中に執筆された「産業組合論」文献を附録として加え一本とされたものである。したがつて今日の農業協同組合については述べるところなく、新著と言うほどのものでない。唯今日の協同組合運動に一の指針を與えるため、出版社の慫慂に應じて上梓されたようである。權威者の執筆した名著の生命が長いとはこのようなことを指するのであるうか。とまれ本書は今日のところ我が文献中、屈指のものであるうが、やがて新しき日本農業の下、農業協同組合が生誕した場合、相當の改訂があることと思はれる。

四 商工省産業復興局振興課編「商工協同組合法の解説」(B6版 二〇〇頁、昭和二十二年二月、東京、日本經濟新聞社出版部發行、定價二十圓)

本書は商工省の谷敷・鈴木兩事務官が、「商工協同組合法」の施行(昭和二十一年十二月一日)された直後、組合の實務に當る者のために執筆されたものである。商工協同組合の總論、各論にわたる諸事項が一々條文に照して詳しく解説され、附録に關係法令が記載されて

ゐる。關係者のぜひと参照すべき好文献である。

尚、商工協同組合法の逐條詳解をした新刊書に、稻川宮雄氏著「商工協同組合法」(東京、有斐閣發行、定價七拾圓)がある旨廣告されてゐる。氏は商工協同組合中央會の常務理事であり、組合制度研究の第一人者であるから、本書も必讀書に相違ないが、未だ手許にないので内容の紹介はできない。

以上のほかパンフレット式著作で有名なものに賀川豐彦氏著「協同組合の理論と實際」(ラツキー文庫3 昭和二十一年六月、東京、コバルト社發行、定價二圓)、波多野鼎博士著「協同組合の原理」(自由文庫叢書、昭和二十一年六月、福岡市、傳信堂發行、定價二圓)等があり、共に大衆向である。尚、中央公論、改造等の評論雜誌に關係論文が屢々出てゐるが、これらを一々あげるとは紙幅の關係で省略し、専門誌として「協同主義」のあることを記しておこう。これは協同主義協會(東京、昭和二十年十一月一日發會)の機關誌にして、最初「協同民主主義」と稱してゐたのを第八號(昭和二十一年十二月)より改稱したものである。きはめて清新な論說、時論、資料等が載つてゐるから、上記のごとく單行書に以前の復刊が多い今日、甚だ貴重な文献と言ひ得る。――昭和二十二年八月二十日――